

# 宮下清計氏のこと

——浜松中納言物語研究史稿——

中西健治

## はじめに

浜松中納言物語の研究は、今日でこそ平安末期物語群の一つとして年間にいくつかの論文が発表されるようになってきているものの、つい半世紀前まではあまり注目されない物語の一つではあった。例えば昭和五年に刊行された藤田徳太郎氏著『平安朝物語選要』の浜松中納言物語の研究書の項には岡本保孝の「浜松中納言物語系譜」しか示されていないが、少し後の昭和十一年に出た清水泰氏の『平安朝物語新選』のこの物語の解説では「よき注釈書なし」とさえ述べられているのである。その後、近年になって数々の書誌的発見や手堅い研究が重ねられてきて、次第に市民権を持つに至ったのであって、かの源氏物語と同じ物語作品とはいえ、ずいぶん異なった研究のあしどりでもあった。やがて昭和三十九年、松尾聰氏校注の日本古典文学大系が刊行され、この書によって研究基盤が確立されたことは大方の認めるところであろう。松尾氏の厳正な校注態度によって浜松中納言物語がより深く、的確に理解されるようになったのであった。その氏が古典大系の「解説」で次のように述べておられる。

研究としては、古くは詞寄せの類に桃園文庫蔵岸本由豆流筆の一卷、国立国会図書館蔵浜松中納言物語目録一卷（高田与清編、群書搜索目録、第一一冊）、系譜に京都大学図書館蔵岡本保孝編のもの一卷があるほか、ほとんど見

るべきものはないようである。明治以降でも註釈として、わずかに前記の諸叢書本の頭註が見られるだけであったのが、宮下氏の校註本が出て、はじめて精密な頭註・解説・年譜・系譜が具わった。氏の施された頭註は、開拓者のお仕事の当然の運命として間々失考とみられるふしもないではないが、きわめて誠実な態度で多くの不審を明らかにせられた劃期的な業績であることに何等疑念を挟むべき余地はない。本書における筆者の頭注は、氏のおかげを蒙ること甚大であった。

(二四〇頁)

また、鈴木弘道先生著『平安末期物語研究史／寢覚編 浜松編』の「第二章 浜松中納言物語研究史」「第三節 第三期の研究 一 第二次世界大戦後、昭和三十年までの研究」は、次の文章から説きおこされている。

浜松に関する画期的な注釈書が現われたのは、第二次世界大戦後で、その嚆矢として、昭和二十六年に宮下清計氏校註「浜松中納言物語」(『新註国文学叢書』二十五。大日本雄弁会講談社刊)が刊行されたが、その前年の昭和二十五年には、広島市立浅野図書館蔵の浜松末巻を翻刻して詳細な解題と略注を施した「浜松中納言物語末巻」(古典文庫第三十一冊)が松尾 聰氏によって公にされている。この二本は浜松研究者にきわめて多大の便宜を与えることになったが、いずれも部数が限られていたため、たちまち入手困難となったのは、まことに惜しむべきである。

(三二五頁)

この文章に続いて松尾 聰氏の『浜松中納言物語末巻』の解説の一部、松村博司氏の「浜松中納言物語と更級日記における『あはれ』について」(『日本文学研究』昭和二十五年五月号)の要旨が引かれ、次に『新註国文学叢書 浜松中納言物語』(以下、『新註』と略称)の解説の一部が掲げられているのであるが、その前文として鈴木先生は、「頭注は、従来の類書と比較して最も詳細で、きわめて有益である。」と述べられ、九十頁に亙る「解説」、さらに「補説」がゆき

わたったものであり、そのうえ年譜や登場人物の系譜などを記す「付録」も含めて、「読者・研究者にとつて甚だ便利なものであるが、今日ではすでに稀覯本の一つになっている」ことを惜しまれてもいるのである。もつとも、ありがたいことに、平成十一年、クレス出版から『物語文学研究叢書』全二十六巻（神野藤昭夫氏監修・解題）の第八巻として復刊されたために、この憂いは解消されたのであった。本書、古典大系、そして近く刊行される池田利夫氏の新編日本古典文学全集とを併せ、浜松中納言物語研究は確実に前進しているのである。そのような時であればこそなおさらに、原点を見据える意味においても研究史上画期的業績と評される『新註』に就いて学んでおくことは必須の課題であると思うのである。

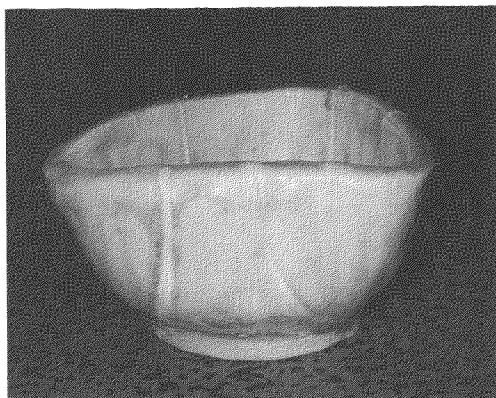
### 一 『新註』の誕生と執筆姿勢

川瀬一馬氏は『随筆 蝸牛』のなかで『新註国文学叢書』の刊行計画について次のように述べておられる。

この上京の時（松井簡治氏ノ葬儀ニ筆者注）、高木君から相談を受けたのが「新註国文学叢書」の出版である。敗戦のこの時点で日本民族はもう一度真に古典を顧みる心が必要である。中でも今の時世で是非とも国民に読ませたいものは何と何か。先ずそれを択んで内容がよく理解される読みやすい古典を提供したいと思う、是非力を貸してくれとのことである。高木君は国語漢文の古典をしつ



写真(1)



写真(2)

かり読み込んだ基礎を持っているから、大事な時世にこういう企画も立ったのである。(中略)

奈良時代から江戸時代まで、七十五巻・百一冊の企画を立て、私は陳開先の吉野へ帰って、翌二十一年五月には方丈記の原稿を完了し、十二年三月に東京へ復帰転入した。(中略)私は監修の責任として、各担当者の原稿に目を通して訂正を索めた。四六判で扱い易い形にしたけれど、まだ何分用紙その他一切の資財が甚だしく不足であるのと、インフレの進行最中で叢書の逐次刊行は容易でなかった。その上、同志の手も少し不足で、漸く二十五冊まで行った時、世間は源氏物語ブームになりかかったので、源氏を出して盛り返そうということになり、かねて源氏を引き受けることになっていた山岸徳平先生に力を添えて貰うことになった。

(三〇一・三〇三頁)

かくして山岸徳平・能勢朝次・佐伯梅友・川瀬一馬各氏を監修者として『新註国文学叢書』は昭和二十三年五月の「徒然草・方丈記」を第一回配本としてつきつきと刊行されたのであったが、四年後、突如として休止されてしまった。その第二十五巻目にあたるのが宮下清計氏担当の浜松中納言物語であったのである。宮下清計氏の東京高等師範学校における一年先輩が川瀬一馬氏であり、東京文理科大学で山岸教授の指導を受けて浜松中納言物語を卒業論文として提出された宮下氏が校注者に選ばれたことは、あるいはごく自然なことであったと思われる。余談ながら宮下氏と川瀬氏との交際は終生続いたのであった。(写真(2)参照)氏は文理大卒業後、「国文学論叢」に矢継ぎ早に浜松中納言物語

に関する論文を発表されており、その後もいくつかの論文を執筆されているが、それらすべてを『新註』の「解説」と詳細な註釈に注ぎ込んでおられるのである。『新註』の「月報」に寄せられた山岸徳平氏の「浜松中納言の事ども」には次のように記されている。

さて、宮下君は、この転々と書写による誤りの多い本文に取り組んで、今日まで十余年、一日として怠らなかつた。昔、山形師範に勤務中も、註解を造つて私に寄せられたが、残念ながら、それは、戦災によつて、私の家や本の類と共に、烏有に帰した。然し、多年倦まず、対象を掘り下げ、血の出る所まで切り込まれた研究の集積が、今度、いよいよ世に出たのは、同君の喜びだけではなく、斯界に多大の寄与をなすものとして、大慶至極である。浜松中納言の本文や註解の研究が、此処に、一線を画した事になるのは、疑ふ余地がないと思ひ、宮下君に感謝し、その労を大いに謝する次第である。

ところで、『新註』の学問的姿勢と評価の端緒を窺うにはまずは「凡例」を見るにしくはなく、十三項目に互つて説かれている文言のうち、注目すべきいくつかをあげてみることにする。

(a) 本書は、巻一から巻四までは丹鶴叢書本を底本とした。旧帝国図書館蔵本、尾上八郎博士蔵本を参考にしたが、底本の面目を重んじて、私意による訂正は行はない。明らかに誤りと認められる箇所や疑問の存する点については、他本と対比しつつ頭註に私見を記した。

(b) 底本は丹鶴叢書本尾上本とも、適宜漢字を当て、送りがな、かなづかひを正し、句読点を附したが、底本の読み方については私意を加えず厳密を期した。

(c) 卷一から卷四までの頭註については、校註日本文学大系本及び博文館叢書本の頭註から多くの恩恵を与へられたが、なほ新見を出すべく努力したつもりである。頭註としては過分と思はれるほどの字数を費したのも、できる限りの精解を念願したからである。

(d) 卷五は従来註釈がなかつたが、本書は最初の試みとして頭註を附した。不備の点もあらうかと思ふが、大方の御批正を願ひたい。

(e) 解説は主要事項を概説し、詳述を要する事項については（解説）補説を附した。

(a)・(b)は底本採択に関わる問題である。明治・大正期にかけて出された浜松の校注本（日本文学全書・第六編、国文大観・物語部三 雑上、校註日本文学大系・第二巻など）は尾上本の発見される以前の刊であるから四巻本ではあるものの、その本文校訂は不十分なものであつた。比較的頭注が整備されている校註日本文学大系でさえ、「例言」に「尾上八郎博士所蔵の写本をもととし、二三の異本を参照しました」とあるごとくであつて、仮に尾上本を忠実に閲していたならば浜松の本文は当然、五巻になつていたはずなのである。また昭和の初めに出た校註博文館叢書や新釈日本文学叢書も本文校訂という点からみれば、今日の研究水準からはいささか不満の残るものであつた。わずかに藤田徳太郎編『平安朝物語選要』（昭和五年十二年発行）は浜松をごく一部分（八頁）取り上げ、その巻数について「猶、最近終の一卷発見せられて、全五巻となりたれど、初の一巻は未だ備はず」と尾上本の存在を意識しつつも、本文は丹鶴叢書によつてゐることを明記してゐるのであつた。そのような情況にあつて、底本に関して「私意による訂正」を避け、不審箇所にはその旨頭注に記すという厳密な姿勢は実に高く評価されなければならないことであらう。一例をあげておく。

いでや思ひ立たざらましかば、いかにいみじういおせからましと、よろづこの御命にては、慰みて、頼もし嬉しと思へる気色を、

〔新註〕九九頁・『大系』一五六頁

「この御命」の「命」の箇所は、『大系』補注(二三)でも不詳文字として諸本間の異同に触れ、「前」「心」「衆」とする本のあることから、「前」の可能性のあることを示唆されているが、『新註』の頭注では、底本の傍書「心 一本」にも触れながら、「心」ならば意味は通ずるが、「この御前」などの誤写ではあるまいか。さすれば、御子の御前の意となる。」と本文への厳正な不審表記と的確な私見を簡潔に記されているのである。

(c)・(d)は浜松中納言物語研究史上、最大の功績ともいえるべき頭注の精密さについて自信をもって表明されていることである。見開き二頁の本文に対して両頁の上段のみでなく、まま奇数頁の左数行分を三段に分割しての詳細な注が記されているのである。本文の通釈、本文の異同、考証など読解するに手助けとなるような記事が、先にも引用した松尾 聰氏の言のとおり「きわめて誠実な態度で」施されているのである。これについての用例はいま省略に従わざるをえないのであるが、画期的注釈の範たる『大系』の母胎あるいは前身として『新註』があったとみることは紛れもない事実であろう。この点について宮下氏の恩師、山岸徳平氏が「此処に、一線を画した事になる」と評されたのは決して過大評価ではなかった。とりわけ巻五の頭注はときに本文の四、五行から七、八行分を全訳するような箇所がままたつて、「最初の試みとして頭注を附す作業の関心が本文読解という点に注がれていたとみられるのである。巻五については既に松尾 聰氏の考証論文(『浜松中納言物語末巻略考』・『国語と国文学』昭和六年四月)／『浜松中納言物語末巻に就いて』・『文学』昭和六年十月)でその大要が判明していたのであるが、本文に即しての具体的読解は『新註』によってはじめてなされたことであった。

(e)の「解説」は十二項目、四十五頁にわたり全般的な説明を記し、その後にはほぼ同じ頁数を費やして「解説」補説」がある。これらは「補説」の末尾に附記されているように「昭和二十五年文部省人文科学研究奨励交付金を受けて」なされたものと思われ、第一章の「平安時代末期の世相」や、続く「時代思潮とこの物語の史的位位置」という巨視的な観点からの考察や浜松中納言物語を説く際に必ず触れねばならない作者、題名、首巻、唐の描写、構想、諸本や注

釈書・参考書類に及ぶ「解説」、首巻をめぐる諸説吟味考証や「末巻の巻数に関する諸説並びに私考」「唐の描写に対する諸説」という微視的な点に触れる「(解説)補説」とがあって、充実した研究書の体をなしている。

以上、「凡例」の中から『新註』の執筆姿勢を窺い知ることのできると思われる数箇所をあげてみた。今日でこそごくありきたりの事柄も史的位相に据えて的確な評をくだすべきで、当時、平安末期の物語は日陰の土壌に細々と育っていた作物のように扱われていた。それに温かい日光を浴びせることは必ずしも容易なことではなかったはずである。その意味で『新註』の完成によってこそ日の光が隈々を照らし出すことになったと言っても過言ではないであろう。

## 二 宮下清計氏の経歴

ところで、『新註』の著者・宮下清計氏とはいかなる御経歴のかたであろうか。これについて記しておこう。氏が教育関係機関に提出されていた履歴書をもとにして、その要点のみを摘記した。

【本籍】長野県上伊那郡中沢村二六八〇番地 戸主 糸雄 長男

【生年】明治四十(一九〇七)年十二月一日

【経歴】(主要項目のみ)

大正十五 (一九二六)年三月 長野県伊那中学校卒業

同 年四月 東京高等師範学校文科第二部入学

昭和五 (一九三〇)年三月 同 校 卒業

同 年三月 青森県立青森中学校教諭



- 昭和七（一九三二）年三月 同 校 休職
- 昭和十（一九三五）年三月 同 同 大 学 卒業
- 昭和十五（一九四〇）年五月 静岡県立静岡中学校教諭
- 昭和十七（一九四二）年三月 山形県師範学校教諭
- 昭和十八（一九四三）年四月 山形県師範学校附属国民学校主事
- 昭和十九（一九四四）年十一月 長野師範学校教授
- 昭和二十（一九四五）年三月 召集により東海第五十部隊に入隊
- 昭和二十一（一九四六）年五月 召集解除復員
- 同 年八月 信越北陸地区学校集団教員適格審査会の判定
- 昭和二十二（一九四七）年四月 長野県上伊那郡中沢村立中学校事務取扱
- 同 年五月 同 校 校長
- 昭和二十五（一九五〇）年六月 文部省より昭和二十五年度人文科学研究奨励交付金を受ける  
（平安時代末期文学に於ける史的特殊相）
- 昭和二十六（一九五一）年三月 長野県伊那北高等学校教諭（教頭）
- 昭和二十七（一九五三）年十一月 長野県高遠高等学校校長
- 昭和三十二（一九五七）年四月 長野県木曾西高等学校校長
- 昭和三十五（一九六〇）年四月 長野県教育委員会高校教育課教学指導課係長兼指導主事

宮下清計氏のこと

(国語・社会担当)

昭和三十九(一九六四)年四月

長野県県ヶ丘高等学校校長

昭和四十(一九六六)年三月

同 校 退職

昭和四十(一九六六)年四月

長野県教育センター(現、長野県産業教育センター)所長

昭和四十(一九六九)年三月

同 センター退職

昭和四十五(一九七〇)年十月

私立塚原学園天竜高等学校(現、長野県松川高校)校長

昭和四十八(一九七三)年三月

同 高等学校退職

昭和四十九(一九七四)年三月

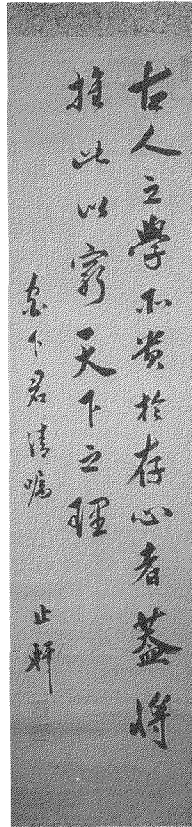
駒ヶ根市教育委員会に勤務

昭和五十二(一九七七)年九月

同 委員会退任

平成 六(一九九四)年九月三十日

死去(戒名、鳳學清溪居士)



写真(3)

宮下氏はこの経歴が示すとおり教育一筋に勤めあげた方であること、同時に教育雄県長野県において早くから指導的立場についておられたことが明らかとなる。そのようななかでいったい『新註』をどのように完成させていかれたのであろう。後年、名古屋大学教授となられた松村博司氏と同僚の時期があり、二人で深更まで研鑽をつま

ことがあつたことが、あるいはひとつのおおきな要因であつたのかも知れない。『松村博司先生古稀記念 国語国文学論集』（昭和五十四年十一月）の巻末に付された「松村博司先生年譜・主要編著論文目録」に宮下清計氏の記事が次のように見える。

昭和十一年（一九三六） 二十七歳

四月、東京文理大卒宮下清計赴任し来る。これより後二人にて平安朝物語類の論講を行う。

昭和十六年（一九四一） 三十二歳

宮下清計氏山形師範に赴任し来る。再び論講会をはじめ。

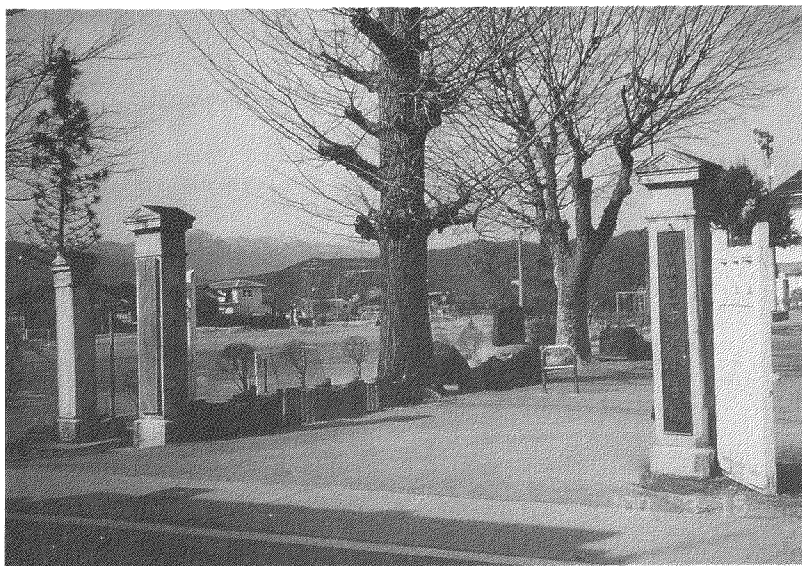
宮下氏の年譜の年次表記と一年の齟齬はあるが、いずれにせよ夜おそくまで真剣に学問談義をされていたことは宮下夫人のお話からも裏付けられることであつた。恩師、諸橋徹次氏、山岸徳平氏の薫陶、さらに先にもふれた川瀬一馬氏との交流、さらにこの松村博司氏との論講を基盤として氏の研究態勢は次第に整いつつあつた。おそらくは研究者として大成するに十分な条件は自他共に認めるところではなかつたかと想像できるのである。そこへ徴兵召集、従軍、復員などの、およそ文学研究とは縁遠く荒々しい時代の激しい波、そして郷里への帰還……。決して恵まれた環境とはいえないなかで、振り絞るようにして完成されたのが『新註』であつた。

### 三 宮下清計氏の人となり

奥様から伺つたところによると、宮下清計氏はずいぶん几帳面な性格の方で、ご自身の勤務の関係についても、まこ

とに詳細な記録をしておられたようであった。その諸記録が現在でも氏の家蔵にきちんと整理されて残っている。たとえば、昭和二十七年十一月から四年半勤務された長野県高遠高等学校の校史『高遠高校の歩み——その八十五年——』（昭和六十年七月刊）を見てみよう。そこに「終章 明日への期待」という一章があり、刊行会の名誉会長としての氏の「その頃の思い出」が掲載されている。縁ある方々がそれぞれに思いをこめて執筆されているが、なかでも五頁ぎっしり埋められた氏の文章は質量共に優れたもので、草創期にあつての校舎建設に関わること、優秀な生徒や先生を確保しての、また総合制から普通科への統合などに関わつての学校経営のこと、校歌の完成にいたるまでのこと等々、人、時、所すべて精確に記されているのである。単なる長々しい懐古談に終つていないところに氏の人となりが見られるようにも思われる。もちろん優れた教育者であつたことは言うまでもない。『長野県伊那中学校 伊那北高等学校 七十年史』（平成二年九月刊）に「教頭の栄転に生徒が反対 大さわぎの離任式」という見出しの困み記事がある（四三四頁）。昭和二十七年十一月十二日の出来事。教頭であつた宮下清計氏が高遠高校の校長として発令されての離任式のこと、記事は、「この日離任式が行われることになつた。突然の人事異動に驚いたのは生徒たち、信頼する教頭に行かれてはと、代表が太田勇愛校長に離任式の延期を申し入れた。（中略）校長が登壇するや挨拶をさせまいと猛然とさわぎ立てたのである。しかし悠然としてさわぎの鎮まるのを待つ校長に、生徒らの方がついに根負け。機を見て校長が教頭の転任を告げ、これを受けて宮下が挨拶。『惜しんでくれるのはうれしいが、軽率妄動は慎んでほしい』と諭され、みなしゅんとなつてしまつた。宮下は最後に「少年老い易く……」と朱熹の『偶成』を朗々と吟じ、われに却つた生徒たちが拍手でこれに應えて式は無事終了。」と、劇的かつ爽快な場面を伝えている。この記事ひとつから人間宮下清計像を窺うことは決して不可能なことではない。

中沢中学校の校長、伊那北高校の教頭、高遠高校、木曾西高校、県ヶ丘高校の校長として、また県教育委員会の管理職として、長年激職に身を置いてこられた氏であつた。その間、平安時代物語の研究に心惹かれる日々もあつたの



写真(4)

ではないかと思うが、氏自身は郷里の中沢中学校に勤務されている頃が、学問的には一番充実していたとも述べておられるようで、やはり高校の教育現場は今日と同じようになかなか好きな研究を続けるという環境には恵まれていなかったようである。ありていに言えば、氏の浜松中納言物語研究は高校の管理職に就かれた頃からはさ程進展はしていなかったのではないか。むしろ大きなうねりの中にある後期中等教育改革に邁進することに時間の大半が費やされることは必至の情勢であつたろう。時代の波と直截に関わり合う教育。その大変動のうねりに真摯に向き合えば向き合うほど、研究とは縁遠い日常生活があつたはずである。加うるに氏の真面目な性情である。氏は『新註』の「月報」に次のように述べておられる。

その頃、郷里では中風の老父が家を守っていたが、私が帰還すると急に衰えを見せ始めた。二十二年の春、私は家へ帰らなければならなくなり、新制中学の発足を機に、止むなく郷里の中学へ転じた。学問的には刺激のない山村で新学制の荆の道を踏まなければならな

くなつた私は、「浜松」はおろか国文学の研究などということは無縁なことのような世界へ入つてしまつた。私の頭は、いつの間にか校舎の建築やPTAや公民館の創設などという方面に全機能を動員するようになっていた。ところが突然、在京の川瀬一馬兄から叢書発刊のお話があり、「浜松」を担当するようにとのおすすめがあつた。私は眠りから醒めた思いで再び「浜松」を顧みるようになった。

その後三カ年、私は両刀使いの生活方式で過して来た。草深い村里にあつて古典の香を懐しみ、その現代的意義を考え、新しい古典研究の方向に思いをこらすのも楽しいことである。時流と環境の障壁にたじろいではならぬ。鹿持雅澄の学究心は尊い教訓でなくてはならぬ。

校正を終つて私の「浜松」の貧しさを思う心の中には清らかな愛情が秘められていることに気づく。この道は細くともよい、生涯を貫く道であつて欲しいと念願する。(二二五、一一、二〇)

『新註』完成を目前にしていた氏の高揚する思いが抑制された筆致のなかから滲みだしていることは明らかではあるが、それは同時に氏が「浜松」研究と袂別を余儀なくされる直前の心況を照らしだしているものでも、今にして思えば、あつたのである。とりわけ末尾箇所はその思いが深々と籠められているように思えてならないのである。

「思えばかわいそうな一生でした」……奥さんのふと漏らされた一言は重く私の心耳に響いた。

### おわりに——宮下清計氏の著書一覽——

宮下清計氏の著書は学術書としては『新註』一冊ではあるが、氏の几帳面な性格を反映する諸事にわたる克明な記録が残されており、これらもまた十分に著書ともいい得るものである。やがてはご遺族によつて日の目をみることも

あろう。

最後に氏自身の手によって刊行された著書を掲げて、若干の解説を記しておこう。ただし(2)以降はすべて私家版である。

- (1) 『新註国文学叢書 浜松中納言物語』 (昭和二十六年一月)
- (2) 『帰去来 葛原学園物語』 (昭和五十三年六月)
- (3) 『北海道 スケッチの旅』 (平成三年十月)
- (4) 『療養つれづれ うたとスケッチ』 (平成三年十月)
- (5) 『近郷所在の句碑鑑賞』 (平成三年十二月)

(2)は宮下清計氏が昭和四十五年十月五日から四十八年三月三十一日まで勤務された私立塚原学園天竜高等学校(現、長野県松川高校)でのことを小説風に綴られた五百頁に垂んとする著書である。ただし、内容がかなり学園内部のことに関わるだけに、あえて小説風に仕立てられているもので、副題(葛原学園物語)からして相当注意を払われているようである。「足かけ四年のここでの生活は、私にとっては、わが教育の総決算のような大事な意味をもっていたのに、漕ぎ出してみると、嵐の大海を漕ぐ小舟のようなもので、難破に次ぐ難破に終ってしまった。私は持てる精力を使い果たし、敗北感から容易に立ち直ることができなかつた。」(「あとがき」という苦々しい文言に象徴されるような癒しがたい思いで一氣に書き下ろされたものであつた。もちろん、教育者として、また人間としての宮下像は本書に鮮明に表われているのである。

(3) 昭和五十八年六月十三日から六泊七日、親類縁者十五名で北海道を観光旅行されたときのスケッチブック。(層雲峡、川湯温泉、登別温泉など)

(4) 昭和五十九年三月末から肺動静脈漏で昭和伊南病院に入院し、後に東京都中野病院に転院して、計九十三日間の療養生活を送られたときの短歌とスケッチ集。そのうちの数首を引いておこう。

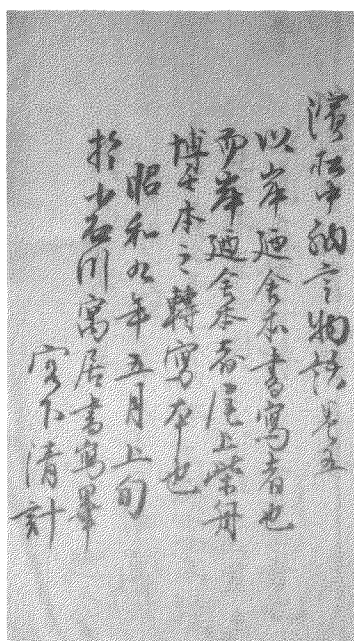
患者みな同じベッドに臥しをれど ことなる運命負うてゐるべし

ひと夜さのわが家の床に安らぎて 運命は天にゆだねむとする

ふるさとの空なつかしき夕べなり 高層ビルに映ゆる夕映

広告のちらしで作りし短冊に 筆にて歌を書きて慰む

(5) 表題のとおり、近郷に散在している句碑について解説と鑑賞を五章を設け簡潔に記されたもの。「下島家墓碑の追悼句」とは、芥川龍之介・室生犀星・久保田万太郎の句が寄せ書きのかたちで碑になつてゐるもの。駒ヶ根市中沢原の下島勲(号、空谷)の一人娘である行枝の夭折を惜しみ、三人が各々、追悼の句を献じたものを下島家で句碑に仕立てたものである。「奇壁・碧梧桐の句碑」は高遠公園にある広瀬奇壁の「斑雪高嶺朝光驚啼いて居」と碧梧桐の「西駒



写真(5)

ハ斑雪れてし尾を肌ぬぐ雲を」についての解釈。余録として、句碑を建設した広瀬省三郎(号、奇壁)や碧梧桐について記す。その続編一編がある。「荻原井泉水の句碑」は、同じ高遠公園にある「花を花に来て花の中に坐り」について、「関口比呂志の句碑」は碧梧桐を慕った医師関口廣司の句「十蔵山時雨の落葉も枯れが歯朶さそふ」についての解釈と鑑賞などが記されている。各章末には参考文献と注記があつて、おのずから論考の体をなしている。小冊子なが



ら力の入ったもので、例えば、注記として「波礫」の「礫」について注意したり、奇壁が用いた「剗々」を「皔々」の誤りであろうと述べておられるあたり、恩師である諸橋徹次氏の学風を感じさせる。なお、本書は宮下清計氏の御葬儀に香典返しとして参列者に配布されたものでもあった由である。

### 附記

拙稿は浜松中納言物語の注釈を書き進める過程で成ったものである。『新註』を参照することからすべてが始まることであるから、つねに気にかかっていたことでもあった。そのような折も折、駒ヶ根東中学校校長（当時）小穴廣光氏から宮下清計氏の奥様がご健在で、いろいろなお話が伺えることなどの丁寧なご教示をいただき、それは怠慢な小生を発奮させ、早春の、また晩秋の伊那路へ赴かせることになった。拙稿はじつに多くの方のご恩を受けて成った。とりわけ宮下清計氏ご夫人 綾子氏、宮下氏の従弟 竹村幹雄氏、長野県高遠高校校長（当時）長田 孝氏、小生の教え子であった三宅裕美氏（長野県伊那北高校、相愛大学人文学部卒業生）、ご夫君 浩一氏（長野県飯田長姫高校教諭）、兵庫県立神戸高校教諭 永田 實氏にはとくにお世話になった。記して感謝申し上げる次第である。

（平成十二年十二月稿了）

### 【写真説明】

- (1) 「昭和十五年九月静岡赴任送別記念於東京」と記されている。弟、慶正氏と。（宮下家のアルバムより）
- (2) 製作者、川瀬一馬氏から贈られた焼き物。糸尻に「かずま」とある。
- (3) 東京高師卒業にあたって宮下氏に与えられた高師時代の恩師、諸橋徹次氏（号、止軒）の書。
- (4) かつての上伊那郡中沢中学校の校門付近の光景。現在は中沢小学校。
- (5) 宮下氏の筆写された浜松中納言物語巻五の写本の奥書。この一丁前には「岸廻舎」の書写奥書が次のように記されている。「濱松中納言物語五巻／以尾上柴舟博士本書写者也／尾上本巻四奥云万治三二月云／蓋尾上本万治本之轉写本  
欽／昭和六竜集辛未大呂中幹／俳人書寫畢 岸廻舎」